

# 高齢世代による内発的地域づくりを支援するワークショップ手法の構築 —長野県富士見町御射山神戸地区を事例として—

Workshop Method to Support Endogenous Community Development by Senior Citizens

-A Case Study of Misayamagodo District, Fujimi Town, Nagano Prefecture-

氏名 高山 弓美

指導教員名 中島 正裕

## 1. はじめに

地域再生法(2005)の施行以降、内発的地域づくり<sup>1)</sup>を求める潮流が一層強まってきている。しかし、全国的に過疎・高齢化が進む状況下、若年世代の地域づくりへの参画が期待できない地域も多く、それに伴い高齢世代の役割がより重要になってきている(今野 2004)。しかし、高齢世代を内発的地域づくりの担い手として位置づけ、活動への参画促進及び意識の醸成を支援する手法についての研究は十分でない。本研究では「高齢世代による内発的地域づくりを支援するワークショップ(以下WS)手法」を提案し、社会実験として適用してその有効性を検証する。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究対象地の概要

本研究は長野県富士見町神戸地区<sup>2)</sup>を対象とした。同地区は高齢農家やI・Uターン者、住民組織によって耕作放棄地の解消などが進む一方で、後継者不足が深刻化し将来の農業の存続が危惧されている。また、集落内では空き家の増加や少子化などコミュニティの衰退もみられ、更に若年世代における地域の将来への関心は高いとはいえない。こうした状況下、“まずは地域固有の魅力や知識・技術を知る高齢世代が中心となり地区の現状と将来について考えて話し合う場が必要”という意識のもとWSを開いた。

### 2.2 分析手順と調査方法

本研究では山浦・中島らにより和歌山県での実践を基に体系化された「農村地域の自律的発展を支援するWS手法」(以下、和歌山モデル)を援用した<sup>3)</sup>。まず、既往のWS手法の分析と対象地区の高齢世代へのヒアリング調査の結果から①高齢世代に配慮したWS手法を仮説的に提案する。次いで②対象地域にWS手法を適用する。更に、ファシリテーターへのヒアリング調査と参加者へのアンケート調査の結果を分析し③提案したWS手法の有効性を検証する。

## 3. WS手法の仮説的提案

高齢世代に配慮するという観点から既往のWS手法の分析とヒアリング調査を行い、WS実施運営上の課題の抽出と改善策(A~E)の検討を行った(図1)。また、その結果を和歌山モデルに反映させた(図2)。

## 4. 対象地域へのWS手法の適用(2012年実施)

### 4.1. 第1回WS(8月18日実施、参加者:23名)

参加者が抱く地域への“想い”や“意見”を語り合う際に、和歌山モデルは参加者全員で話す形式であったが、多人数の中での発言が不得意な人への配慮と各人の発言機会の増加を図るために、本手法では小グループ制を試みた。また、参加者の意見を引き出す役割や意見を代筆して話し合いを円滑化する役割などを果たすために、事前教育を施したファシリテーター(地シス学生)を各班に2名配置した。

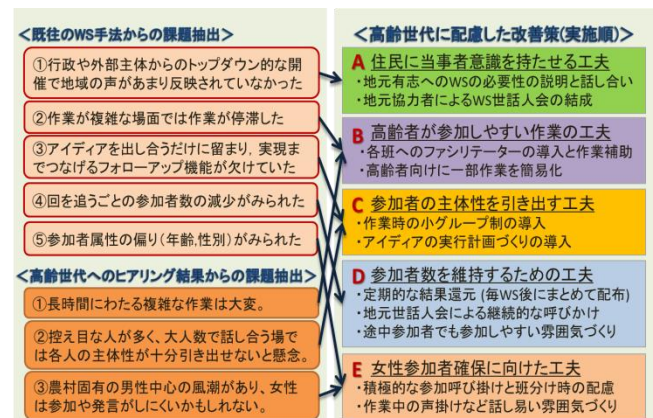


図1 WS手法の改善策の検討

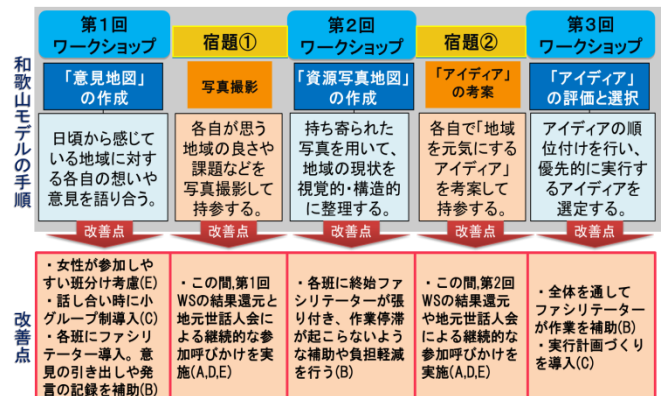


図2 WS手順と改善点

その結果、「農地の荒廃や地域内のつながりの衰退が不安」などマイナス意見 56 個、「昔ながらの里山景観や歴史が誇り」などプラス意見 13 個、今後に向けた提案 20 個で構成される意見地図が完成した。

#### 4.2. 第 2 回 WS (10 月 28 日実施、参加者：16 名<sup>4)</sup>)

第 2 回 WS に向けて参加者には「第 1 回 WS での発言内容に該当する場所やモノの写真撮影(宿題①)」を依頼した。しかし、高齢のため写真の用意が困難な参加者が多いことが事前に判明し、「撮影補助や主催者側によるサンプル写真の用意」で対応した。当日はそれらも用いて、班ごとに「資源写真地図」の作成を行ったが、作業は“写真を用いて地域の特徴を構造的に整理する”という複雑な内容であったため、各班に 2 名のファシリテーターを配置した。これは和歌山モデルにはなかった試みである。

ここでは 2 班の資源写真地図(写真 1)を例示する。“八ヶ岳に代表される美しい自然や日本古来の里山景観、伝統的な行事が残っている事”などを地域の良さとして挙げる一方、“つながりの希薄化”など地域の将来を考える上での不安が多く指摘された。

#### 4.3. 第 3 回 WS (11 月 25 日実施、参加者：21 名)

第 3 回 WS に向けて「資源写真地図の結果を基にした地域づくりアイデアの考案(宿題②)」を依頼した。しかし、これが負担で参加を断念したいという意見が聞かれたため、当日はまず班ごとの話し合いやファシリテーターによる絵や説明の代筆によって「アイデアを追加創出する時間を設置」して対応した。次いで、アイデアの発表(全 21 個)を行い、



写真 1 2 班の作成した資源写真地図

表 1 投票によって選ばれたアイデア TOP5

順位	アイデア名	点数
1	神戸の美しい四季、史跡、正の遺産と負の遺産のマップ化	300
2	炭火焼と収穫祭のイベント開催	240
3	野菜工場(野菜の計画栽培)の導入	210
4	入笠山登山を中心とした観光整備	210
5	ルバーブ組合の活性化	180

投票により優先的に取り組むアイデアの選定を行った。その結果、TOP5 は表 1 の通りとなった。

その後、参加者は TOP5 のうち興味を持ったアイデアに分かれて実行計画づくりを行った。これは和歌山モデルにおけるフォローアップ機能の欠如を補うもので、“アイデアを実現する上での障害”や“協力が必要な主体と役割”などを具体的に考えることが実践への足掛かりになると考えたためである。また、班に分かれる前に各アイデアについてよく知りたいという参加者の提案で急遽「考案者による TOP5 アイデアのプレゼンが実施される」など、内発的地域づくりへの意識の醸成がみられた。

#### 5. 提案した WS 手法の有効性の検証

和歌山の例では回を重ねるごとに参加者が減少したのに対して、本 WS では全 3 回を通して安定した参加がみられたことは特徴的な結果といえる。

これは各 WS の実施結果内で述べた改善点の他、「地元協力者と協働した地域に則した WS 運営」や「定期的な WS 結果の還元や継続的な参加呼びかけ」などが要因となったといえる。また、各班へのファシリテーターの配置が各参加者への細やかな気配りや孫子世代との交流の楽しさにつながったことも高齢世代の継続参加につながったと考える。

参加者アンケートの結果からは、一連の WS への参加を通して日常生活では機会のなかった“個々の参加者の地域における想いの表出化と共有”が行われたことが、参加者の新たな気づきや参加者間の団結を生み、参加者全体で内発的地域づくりへと向かう意識を醸成したことが推察される。

今後の展開としては、今回の WS 結果が区議会に提出され、地域の将来を考えていく上での材料として区全体で情報共有する場が設けられる予定である。

#### 6. まとめ

本研究では、「高齢世代による内発的地域づくりを支援する WS 手法」を仮説的に提案し、社会実験として現場に適用することでその有効性を検証した。

今後は、本研究で提案された実行計画の実現に向けて継続的に支援を行っていくことが求められる。

注

- 1)行政依存から脱却し、住民自らが地域内外の主体との連携を図りながら、地域個性を生かした地域づくりを行うこと。
- 2)人口 1,024 人、世帯数 456 世帯の中間農業地域。農家人口は 233 人、従事者の高齢化率は 29.2%。(2005 年農業集落カード)
- 3)中島正裕ら(2007):農村地域の自律的発展を支援するワークショップ手法の構築,農業農村工学会論文集, No.251,535-544
- 4)集落内の用事とお葬式によって急遽欠席者が出たため減少。